研究ノート

埴輪研究の課題

川西宏幸

一　はじめに

わが国の考古学において、埴輪[1]の研究は、比較的早くから取りくまれたテーマの一つであり、瞥見しただけでも、少なからぬ量の論文をあげることができるが、その多くは、形象埴輪による風俗史的・美術史的観点にとどまっていたようである。だが近年に至って、円筒埴輪の起源問題に注目すべき進展をみるようになり、その他の点でも、埴輪が改めて考古学者の注意をひきはじめたといえば、こうした分野にかかわる者のひいき目かもしれないが、ともかく、従来とは異なる新たな気運の醸成されつつあることは確かである。そこで、埴輪研究の問題点の整理と今後の方向づけとに、本論の主要な枚数を割くことも、あながち無益ではなかろうと考え、この小論をものした次第である。

二　埴輪の出現

埴輪の起源については、幾人かの研究者によって論じられてきたが、いずれも臆説を大きく越えるものではなかった。こうしたなかで、実証性と論理性とを具えて登場したのが、近藤義郎・春成秀爾両氏の論文[2]であった。その所説を詳しく紹介する余裕はないが、「吉備地方で誕生した円筒形埴輪を畿内諸勢力がうけいれ、さらに壺と円筒形埴輪の合体した朝顔形埴輪をうみだし、それとならんで円筒形埴輪の使用が盛行する」[3]という主張が、主な論点といえる。そして、その帰結に至る作業として、吉備地方の「特殊土器類」を「立坂型」・「向木見型」・「宮山型」・「都月型」

の以上四段階に型式編年したわけである。

昭和四二年の論文発表から現在までに、両氏の所論に対する有力な反証は提出されていないが、資料的には、京都府向日市寺戸の元稲荷古墳④・奈良県桜井市の纒向遺跡⑤などで、「都月型円筒形埴輪」が確認され、この問題について若干の展開もみられる。すなわち、元稲荷古墳調査概報⑥のなかで、都出比呂志氏は、円筒埴輪を「ものを載せる器台円筒」と「配列のための円筒（普通円筒）」とに分ける視角から、「都月型円筒形埴輪」の再検討をおこない、近藤・春成両氏のいう都月型a類を前者に、都月型c類を後者にあてようとする企図を示唆している。そして、「器台円筒」が、岡山県を中心とした地域における、弥生式時代後期の特殊器台の系譜をひく点は認めながらも、一方の「普通円筒」まで、かかる系譜関係から説明することに疑念を表し、「普通円筒は、多量に配列することを契機に発生する」という見解を述べている。つまり、墳丘への多量配列を契機として出現する「普通円筒」の故地は、まだ確定していないと考えようというわけである。

しかし、都出氏のこうした新見解も、「普通円筒」の出現を解明したことには、必ずしもならないようである。なぜなら、「普通円筒」自身の祖型が、大量配列という現象の現われる以前に、存在したのか否かについて、言及されていないからである。したがって氏の真意は量りかねるが、かりに祖型がなく大量配列を契機に「普通円筒」が突如に発現したと解するならば、氏の指摘はやや説得力を失う観をまぬがれないし、「器台円筒」のたぐいにその原型を求めると、近藤・春成両氏の所説をかえって支持することにもなろう。この点に都出氏の再論を期待しておくが、いずれにしろ、氏も述べている如く、埴輪の起源問題にとって、前期古墳出土埴輪の編年が焦眉の課題といえるだろう。

加えて、近藤・春成両氏の論文に対する多少の問題点を、あわせ示しておくと、まず、両氏の設定した「特殊土器類」の型式編年のうち、「宮山型」と次の「都月型」とのあいだに、型式学上のヒアタスがあり、とりわけ後者の壺形土器は、畿内の弥生式時代後期におけるある種の壺形土器から変化したという説もある。ゆえに、器台も含めて、「宮山型」から「都月型」への移行が、吉備地方の一元的変遷のみで解決されるかどうかは、まだ断定できないと考える。そのばあい、畿内に原型をもつともいうこのたぐいの壺形土器が、若干の地方差はあっても、九州から関東に至る埴輪出現前の古墳より出土している事実は、示唆的であろう。

また両氏の論文は、「特殊土器類」の型式学的研究に基づいており、「特殊土器類」の生産体制という視点からは述べられてい

ない。この視点を具体的にいうと、「立坂型」から「都月型」に及ぶ変遷のなかで、その生産体制の画期がどこにあり、それが畿内の埴輪の生産体制へいかに繋がっていくのかという点である。かかる研究方向も、埴輪の起源を論ずる際の一視角になろう。

三　畿内における埴輪の編年

今日の埴輪研究に欠けるものは、埴輪の編年である。そして、編年の欠落という事態をもたらした要因の大半は、従来の研究の主眼が概ね形象埴輪に向いていたことにあると思われる。形象埴輪は、器形が複雑で個体差が大きいうえに、器種も多様なため、破片から全形を的確に復原することの困難なばあいが多い。形象埴輪のかかる通性は、それが編年の素材として不適当であることを意味する。それゆえ、埴輪の編年的研究が進捗をみなかったのも、けだし当然なわけである。そこで新しく編年の素材を求めるとすれば、円筒埴輪をそれにあてるのが適当であろう。

さて、円筒埴輪は、胎土・成形・調整・タガ・スカシ・焼成の以上六つの基本的要素に分解できると考える。埴輪編年の基礎に円筒埴輪をおくばあい、これらの諸要素に着眼し、それらの各々の変化を追うことによって、諸要素の有機的結合体としての円筒埴輪が、おのずと一定の時期差を示すことは、比較的容易に推察できる。こうして導きだされた編年私案もないわけではないが、多くは別稿に譲るとして、ここでは、上の六つの要素のうちで、時期差の顕著なものについて、編年上の位置づけを素描するにとどめたい。

まず円筒埴輪の調整を、その施す個所によって、外面調整と内面調整とに大きく分け、さらに外面調整を、タガをつける以前の調整（第一次外面調整）とそれ以後の調整（第二次外面調整）とに分けて論を進めよう。そのばあい、時期差が著しいのは外面調整であるので、少し外面の調整法について触れておくと、板の木目にほぼ直交する部分で器壁をなでることによって調整するのが一般的であり、ハケメと呼称されているのがこれにあたる。また、ときに木目に平行する部位を調整に用いることもあるし、ヘラケズリ・ユビナデなど、板によらない外面調整法も存する。

いま外面調整による編年を述べるについて、記しておきたいのは、都出比呂志氏の以下の指摘である。すなわち、「外面をタテ方向の刷毛目で調整したのち、突出度の強いタガを貼りつけ、タガの上をヨコナデする特徴を持つ円筒埴輪は前期古墳出土の円筒埴輪の中でも古い要素を示し、タテ方向の刷毛目調整のあと、タガを貼りつけ、その上をヨコナデしたあと、さらにタガとタガとの間を横方向の刷毛目で再度調整する特徴を持つものは新しい傾

向を示す。さらに、この二回目の横方向の刷毛目調整を省略したものは、後期以降の円筒埴輪に見られる⑦」という。かかる氏の賢察は、外面調整によって円筒埴輪を大きく三時期に区分した点で、まさしく卓見であり、外面調整による編年もこれを踏まえて進めざるをえないが、氏に対する疑問も全くないとはいえない。というのは、都出氏の言に従えば、前期でも古い時期とした円筒埴輪と後期のそれとは、外面の調整が基本的に同一ということになるからである。そこで、京都府向日市寺戸大塚古墳⑧の円筒埴輪によって、前期でも古い時期の円筒埴輪を代表させると、縦のハケメは第一次外面調整にも第二次外面調整にも用いており、その施し方も後期の縦ハケメとはちがっている。また横ハケメを、第一次及び第二次の外面調整に使うこともある。これらの点からして、古墳時代前期でも古い時期の円筒埴輪の外面調整は、縦のハケメを基調としながらも、外面調整の定式化しない点を特色とする可能性がある。

五世紀に入ると、円筒埴輪の外面調整は、第一次調整に縦ハケメ、第二次調整に横ハケメという一連の技法が大半を占めるに至り、外面調整がある程度画一化する。この時期の横ハケメは、五センチメートル前後の間隔で止めつつ、埴輪を上からみて時計回りにつけるのを通例とする。横ハケメの工具は、板の木目にほぼ直交する部分を主に使うが、ときに平行部分を用いることもある。ところで、こうした一定間隔で止める横ハケメ以外に止めない横ハケメもあり、両者の技法上の差異は無視できない。そして、横ハケメの停止の有無は、ハケメをつける際に工具を器壁から離すか否かという点と関連する可能性もあり、円筒埴輪製作における回転台使用の問題とも、密接にかかわる事象であろう。将来的には、古墳時代前期の円筒埴輪の横ハケメと中期のそれとを分けるメルクマールになるかもしれない。

かくして、横のハケメは、その施し方が次第に粗雑になり、ついには消滅して、第一次外面調整の縦ハケメを主流とする六世紀代の円筒埴輪の生起をむかえる。この縦ハケメをみると、工具で器壁を下から上へなであげながら、向かって左のハケメが右のハケメをきる形で、いいかえれば、上からみて時計回りにつけることが多い。ちなみに、ユビナデ・ヘラケズリなどの外面調整法もあるが、どれも第一次外面調整である点で、縦のハケメと変わりがない。

なお、内面調整には概して時期差をみとめないが、ただ内面におけるヘラケズリ技法の使用は、前期古墳出土のある種の円筒埴輪に限られる。

次にタガについて触れてみよう。古墳時代前期の円筒埴輪のタ

ガは、都出氏の述べた如く、一般に突出度が高い。かてて加えて、タガの上面・側面・下面とも内彎するばあいも多く、全体にシャープな感じである。一方、中期の円筒埴輪のタガは、概ね断面が台形状をなし、鈍重な印象を与える。もっとも、両時期のタガの調整は、親指をタガ上面に、人差指を側面に、中指を下面にあて、上からみて時計回りになでるのを原則とするので、双方のタガのあいだに質的な差はないともいえる。こうした指によるタガのほかに、板状工具で調整したタガも存在するが、それは五世紀代の円筒埴輪の第一段タガに限定できるようである。[9][10]

いずれにしろ、タガの変化が始まるのは六世紀に近づいてからである。すなわち、全般に突出度が低くなり、貧弱化すると共に、技法的には、親指と人差指とを主に使って、器壁になでつける如く調整するようになる。ために、タガの断面が三角形に近くなることがある。その後、埴輪の終末期に至って、第一段のタガがなお一層変形するばあいもある。[11]

スカシの形状にも言及しておくと、古墳時代前期には、三角形・巴形・鉤形など多彩であるが、中期以降、円形にほぼ画一化するらしい。[12]

ついで、埴輪の焼成方法について、やや詳しく述べることにする。

焼成方法を考える上で、わけても刮目すべきは、埴輪の外面に付着した黒斑の存否である。[13] この黒斑というのは、円筒埴輪のばあい、外面の一方とその反対方向の外面とに、縦に長くつくのを常とする。たとえば、先に述べた寺戸大塚古墳の円筒埴輪では、底部が確認できる五十本余りのすべてに黒斑があり、どれもこうした位置関係をとっている。円筒埴輪における黒斑の有無を、京都府城陽市の久津川古墳群及びその近傍の古墳で確かめてみると、金比羅山古墳[14]・平川車塚古墳[15]・宇治二子山北墳[16]の円筒埴輪に黒斑が存するのに対し、青塚古墳[17]・宮ノ平第一号墳[18]・坊主山第一号墳[19]・冑山第一号墳[20]では、形象埴輪も含めて黒斑のある埴輪は皆無である。とりわけ青塚古墳で発掘された円筒埴輪約一〇〇本のうちのいずれにも黒斑がない。

かかる相違は、単なる偶然の所産ではなく、焼成方法の根本的な差異に起因するといえる。というのは、大阪府羽曳野市誉田白鳥埴輪窯[21]や福岡県八女市忠見区立山山埴輪窯[22]の出土品には黒斑がなく、したがって、黒斑を欠く埴輪は、須恵器窯と同様な構造の窖窯で焼成した蓋然性が高いからである。それに対して黒斑をもつ埴輪は、弥生式土器と大差ない焼成法によると推測される。

しかし、以上の点を定説化するには、まだいくつかの検証を要する。たとえば、黒斑の付着する原因について、若干の腹案もな

いわけでもないが、いまだ確定的な解答を得ていない。ただ少なくとも、弥生式土器の黒斑に関する佐原真氏の解釈[28]を、埴輪に援用することは不可能であろう。また逆に、窖窯で焼けばなぜ黒斑が生じないのかという点も、十全な説明を用意できない。そのほか、黒斑をもつ埴輪の焼成址が発見されることも、この問題を大きく進める結果をもたらそう。

かくの如くさまざまな難問をかかえながらも、黒斑の有無が焼成方法のちがいを意味し、その消失が埴輪における窖窯の採用と不可欠に結びつくという如上の論点が一応認められたものとして、話を先へ進めることにしよう。

さて、この焼成方法の転換期、いいかえると埴輪の焼成への窖窯の導入時期を探ると、久津川古墳群では、平川車塚古墳から青塚古墳へのあいだに求められることになり、古墳の編年からみた実年代でいえば、五世紀中葉に比定できる。大阪府高槻市弁天山古墳群など座右の資料からして、この年代比定は、畿内全域の埴輪に及ぼしてほぼ誤りないと思われるし、そのばあい、田辺昭三氏の説く須恵器生産の上限[29]とも概ね合致することになる。つまり、須恵器生産の開始と共に、その焼成法を埴輪へ大幅に取りいれたという状況も、想定できるわけである。

ただし、伝応神陵から出土したという埴輪については、少々問題が残っている。というのは、この古墳出土という埴輪が、東京国立博物館と京大考古学研究室とに保管されているが、どれも黒斑のない埴輪であり、窖窯で焼成した確率が高いからである。そして、伝応神陵の年代を五世紀初頭とすれば、窖窯の上限をそこまで引きあげることにもなりかねないし、いきおい、田辺氏のいう須恵器生産の開始期とも一致しないことになる。窖窯の上限に関する、埴輪と須恵器とのこうした矛盾を解くには、五世紀初頭という伝応神陵の年代自身を改める方途もあるし、その年代観を認める立場なら、これらの埴輪を、伝応神陵築造以後に追加樹立したものとみなすこともできる。また、正規の発掘品でないことを理由に、伝応神陵出土に異議を唱える余地もないとはいえない。いずれにしろ、この点の究明は、単に埴輪の編年にとどまらず、多くの方面に波紋を投げかけるであろう。

右に論じた円筒埴輪の諸要素のほかに、畿内における六世紀の円筒埴輪の特色を、もう一点あげておこう。それは底部調整技法と名付けた技法である。この技法は、円筒埴輪製作工程の最終に近い段階で、円筒埴輪を倒立し、底部付近内面をおさえることによっておこなう。そのばあい、親指を底部付近内面に、残りの指を外面にあて、親指で内面を押圧する方式をとるが、残りの指と外面とのあいだに、板状工具をはさんだことも考えられる。こ

うした技法によって、底部末端が〕状に尖ることもあるが、大して尖らないばあいもあるので、この技法が底部末端を尖らせることを意図していたとまではいえない。

かかる底部調整技法をもつ円筒埴輪は、この技法によらない個体と、ほぼ拮抗する割合で一古墳内に並置してあり、しかも、六世紀の埴輪に至る過渡期では、底部調整を施した円筒埴輪に、タガの変化が著しいという特徴を指摘できそうである。底部調整技法とタガとのこうした相関関係は、五世紀から六世紀への円筒埴輪の変遷を解明する手がかりとなるかもしれないが、なにゆえこの技法が現われたかは、必ずしもあきらかでない。

そのほか、小林行雄氏がつとに論じた形象埴輪の遷移[29]も、横ハケメの消滅・タガの変化・底部調整技法の出現という、六世紀の円筒埴輪への一連の変容と、期を一にするようである。

かくして、以上に語りきたった諸点を主な基準にすれば、畿内の埴輪を四時期に区分できることが、おのずから知られるであろう。私見によると、その実年代は、第Ⅰ期が四世紀後半、第Ⅱ期が五世紀前半、第Ⅲ期が五世紀後半、第Ⅳ期が六世紀前半におおよそ比定できると考える。

四　畿内以外の地方の埴輪

畿内における埴輪の出現時期は四世紀中葉にあたろうが、他の地方では少々遅れ、比較的早いところでも、四世紀後葉まで下がるようである。そして、畿内の第Ⅰ期から第Ⅱ期への移行に対応する変化は、岡山県下で、岡山市沢田金蔵山古墳[30]の円筒埴輪と、久米郡柵原町月の輪古墳[31]のそれとの差異にうかがうこともできる。

畿内と他の地方との関係で特に重要なのは、窖窯の伝播である。すなわち、五世紀中葉を境として、畿内の埴輪の焼成に窖窯を広く利用するようになるが、ほぼ同時期に、この焼成法が他の地方へも伝わるのである。実例をあげると、広島県賀茂郡西條町の三ツ城古墳[32]・岡山県総社市三須の作山古墳・静岡県磐田市鎌田の堂山古墳[33]の以上三古墳の埴輪は、黒斑を欠く点で、窖窯によって焼成したと思われる。そして、副葬品などからみて、これらの古墳は五世紀中葉ないし後半代に比定できる。そうしたばあい、田辺昭三氏の説[34]に従って、須恵器生産の他地方への最初の伝播を西暦五〇〇年前後とみれば、埴輪と須恵器とは、同様な窖窯を用いながら、その伝播の時期にずれがあることになる。この点を解決するには、従来の古墳の年代観及び須恵器の実年代を全面的に変

更して、このずれの解消をはかる努力をするか、あるいは、かかるずれを事実とみて、その解釈に力点をおくかのどちらかであろう。

それはともかくとしても、他の地方で埴輪の焼成に窖窯を広範に用いるようになるのは、西暦五〇〇年前後という須恵器生産の伝播が、あずかって力あろう。ここでは微に入るのを避け、六世紀代における埴輪と須恵器との関係について、一応の見通しを述べるにとどめておこう。

まず、畿内から九州までの諸地方では、埴輪と須恵器とを別の窖窯で焼成するのを常態としたようである。それに対して、畿内を除く、畿内より東の地方を通覧すると、三重・愛知両県では、埴輪と須恵器とのあいだに技法の交流はないが、双方を共通の窖窯で焼成しており、一方、静岡県西部や石川県では、須恵器の技法で埴輪を作り、両者を共用の窖窯で焼いている。[31] また関東地方になると、現在のところ六世紀前半代にさかのぼる須恵器窯が確認されていないにもかかわらず、千葉県我孫子市根戸の金塚古墳[32]の埴輪にみる如く、六世紀前葉には窖窯による埴輪が存在しているのである。畿内以外の埴輪におけるこうした地方差の意味するところの多くは今後の研究に委ねておくが、しいてその一端をもらせば、埴輪のあり方からみて、西暦五〇〇年前後という須恵器生産の東方への最初の伝播が、太平洋側は静岡県西部まで、日本海側は石川県までにとどまった可能性があるのではなかろうか。

ほかに、畿内と他の地方との関係について、円筒埴輪第一段のタガを板状工具で整形する技法が畿内とその西に限られるらしいこと、畿内の第Ⅲ期から第Ⅳ期への一連の変化は、他の地方の埴輪にも何らかの影響を与えるが、このうち底部調整技法だけは畿内にほぼ限定できること、[33] 第Ⅳ期でも新しい段階に現われる円筒埴輪第一段タガの一層変形する現象が、畿内より東の地方には及んでいない可能性があること、などがあげられるが、詳細は別稿に譲っておく。

いずれにしても、畿内と他の地方との関係を問題にする際には、畿内から埴輪工人が移動した状況を想定する必要があるばあいと、工人の移動を考慮せずとも、その地方の工人の有する技術の範囲内で、畿内に対応する変化を達成しうるばあいとを、理論上区別することが基本的な視角といえるだろう。

五　埴輪工人をめぐる諸問題

埴輪工人を論じようとするときに、われわれはみずからの眼で、埴輪に印された製作者の微妙な手の動きまでも看取するところか

ら出発することが、必須の条件であろう。この点を看過すれば、一古墳内の円筒埴輪における技法上の相違を工人の差に結びつけるという操作は、徒労に終る可能性を孕んでいるわけである。最近あい前後して公表された二つの論文に、こうした危惧をかいまみたので、その紹介もかねて、ここに論評を加えることにする。発表の順序とは逆になるが、話の続き具合もあるので、まず吉田恵二氏の論文から取りあげてみよう。

吉田氏の論文[24]は、大阪府堺市浜寺南町に所在した経塚古墳の円筒埴輪を、独自の基準で分類し、その技法上の差異から、製作工人の実体を復原しようというのである。氏の論点のうちで正鵠を得ているものについては評価したいが、なかに多少の誤謬を混じているので、ここでは主にその過誤と疑問点とに論を限ることにする。

はじめに、氏は経塚古墳の円筒埴輪の成形を輪づみと断じているが、実見した限り、巻きあげとみれないこともない。だが、なにぶん内面の粘土紐痕が消えており、断定はできない。かりに氏の言に従って輪づみとすれば、畿内の円筒埴輪の成形に、輪づみと巻きあげとの二種類が併存することになって、その意義は小さくない。この点で氏の再論に期待しよう。

輪づみ・巻きあげのいずれであれ、氏が工人差の基準にした技法上の相違とは、直接かかわりがないようなので、しばらくおくとしても、氏の結論にも関連する事実誤認については、それを座視できない。実例をあげると、氏は、底部付近外面のヘラケズリの有無をもって、経塚古墳の円筒埴輪を大きく二分し、各々A技法・B技法と名付けている。だがしかし、ヘラケズリをするB技法とは、実は先述した底部調整技法のことであり、底部付近外面のオサエを、氏はヘラケズリと見誤っている。したがって、「基部外面をヘラケズリする結果、下底面に近づくに従って（引用者補足）（断面が）細くなり」[25]というのは誤りであって、実際には、底部付近内面をおさえる親指の力を、外面で単に支えるだけなので、底部末端の尖るという現象が生じるのは、外面のヘラケズリによるのではなく、主に内面の押圧に由因するのである。

さらに氏は、タガの断面形と調整法とにも着目し、その断面形をM形・>形・⊓形の三種類に分けているが、この三分類は、タガの技法的本質をあまり表わしていない。なかでもM形というタガには、親指をタガの上面（氏のいう上端）に、人差指を側面に、中指を下面（氏のいう下端）にあて、上からみて時計回りになでるばあいと、親指・人差指のあて方及びナデの方向は同じだが、中指を概ねタガ直下の外面にあてるばあいとの二つがある。これをいいかえれば、前者は、親指・人差指・中指を使って、タガを

器壁からなであげることに比較的注意を払うのに対し、後者は、タガに加える中指の働きを減じ、主に親指と人差指とを用いて、あたかも器壁になでつけるかの如くに、タガを調整する。つまり、両者のちがいは、タガ製作原理の差ともみることができるわけである。また、親指と人差指とを主に使う後者のタガが、底部調整技法をもつ円筒埴輪に多い点からみても、両者を〜形タガという同一の範疇に押しこめることは、妥当ではなかろう。ちなみに、底部調整技法の円筒埴輪に限られる>形タガは、親指と人差指のみの調整にかかることを付記しておく。

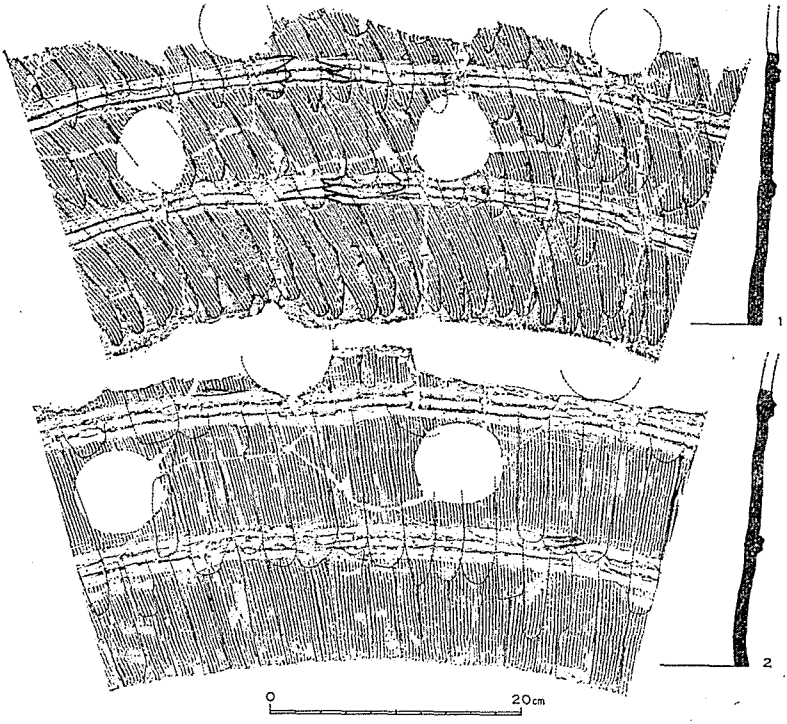
外面調整のハケメの着眼点として、氏は、方向・走り方・密度の以上三点をあげ、方向を右傾と垂直とに、走り方を断続と連続とに分けている。しかしこうした観点は、埴輪工人を識別するのに、やや不充分と思われる。吉田氏の努力を否定するつもりはないが、埴輪工人の抽出をめざす人のために、以下の試みを提起しておきたい。

第Ⅰ・Ⅱ図は、経塚古墳の代表的な円筒埴輪を外面全体にわたって拓影し、ハケメの境界線などを書きくわえたものである。その所見について言及してみよう。なお、括弧内は、吉田氏の論文における埴輪表示である。

第Ⅰ図の1（d類の1）　吉田氏によれば、この円筒埴輪の外面調整のハケメは、方向が右傾し、走り方が断続するという。だが、その製作者を論議する以上、単にハケメの断続・連続にとどまらず、ハケメの施し方も重要であろう。そこで、この円筒埴輪の外面調整のハケメを、俎上にのせることにする。

このハケメは、向かって右下から左上へ、工具で器壁をなでなげることによって施してあり、ハケメのはじまりは、粘土が盛りあがっている。[37] そのはじまりを拓影からたどってみると、次のことがわかる。すなわち、そのはじまりは、底部付近外面を上からみて時計回りに一周したのち、左上方に向かって上昇し、それから水平方向に転ずる。そして、前回とほぼ同一個所に至って、再び左上方に方向を変え、今度はさほど急激な上昇ではないが、左へ進むに従って、上昇の程度がにぶるのである。しかもタガの位置は、ハケメのはじまりが水平に近く移行する高さにある。ハケメとタガとのこうした関係から、この円筒埴輪の製作者の意を汲みとるならば、ハケメをつける段階から、すでにタガの付着位置をある程度予想し、タガによってそのはじまりを消そうとした、と解することも不可能でない。[38]

ハケメの方向も同様に、垂直か右傾かというよりも、その内実を重視すべきである。そのばあい、この円筒埴輪のハケメの傾斜は、拓影の中央部分が両端に較べて幾分大きい。角度のこうした

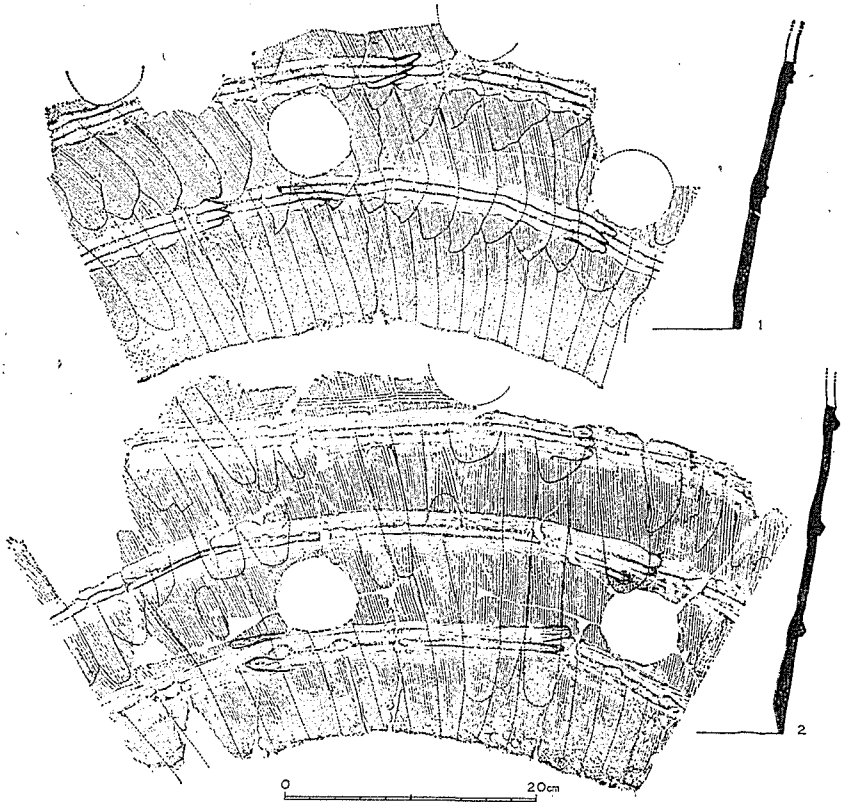


第1図　経塚古墳出土円筒埴輪

差異は、おそらく、工具と埴輪との位置関係の変化などによると推察できるが、その具体的なあり方については、まだ不明な点が多い。

なお、タガの横ナデ調整は、全周を一挙になでるわけでなく、タガから指を離しながら、くりかえしなでるのを常とする。横ナデのこのような開始部分は、第一段タガで一～二個所、第二段タガで少なくとも二個所存在する。横ナデは概してなめらかである。

第1図の2（a類の1）　この円筒埴輪の外面調整のハケメは、吉田氏によると、垂直方向で、走り方が連続するという。氏のいう連続するハケメとは、「タガ間を一気に走るもの」をさすらしいが、氏の定義からすれば、連続という表現を、タガの部分でハケメがきれるばあいと、タガできれずに文字通り連続するばあいとの二様にとることができる。氏は両方の意味で使っているのかもしれないが、どちらにしろ、この円筒埴輪の外面調整のハケメは、随所できれており、連続とみることは難かしい。ハケメのはじまりに上図と同様



第Ⅱ図　経塚古墳出土円筒埴輪

な規則性をみることもできるが、やや不確かである。総じて氏のいう連続のハケメとは、ハケメのはじまりが不明瞭なものを、連続と見誤ったようである。

また、氏はハケメの方向を垂直としているが、やや傾斜したものも含んでいる。タガの横ナデ開始部分は、第一段タガで一個所確認したにとどまる。

この円筒埴輪の製作者を、想像を借りて分析すれば、ハケメのはじまりを外面に残すことを嫌う癖をもっていたために、ハケメのはじまりが盛りあがるのを避け、しかもタガによってそのはじまりを隠そうという配慮までした、と推測することもできる。

第Ⅱ図の1（g類の5）　吉田氏は、この円筒埴輪の外面調整を、断続・右傾のハケメであると説く。ハケメのはじまりをたどると、外面をまさに螺旋状にめぐっており、同じ断続とはいっても、第Ⅰ図の1と

施し方が多少異なるとみることもできる。ハケメの傾斜にはやや差があり、たとえば第二段目のハケメについて、角度の変化する部分が二個所存する。

タガの横ナデ開始部分は、第一段タガに三個所ある。このうち一個所はタガの粘土紐の端にあたり、このばあいはナデの開始＝終了部分でもあるが、それがスカシの位置と合致している。かかるあり方からみて、製作者が、ここを何らかの基準位置にして、第一段タガ及びスカシを作った状況も考えられる。とすれば、タガの横ナデ開始部分がその反対部分にも一個所あり、同じくスカシの位置と対応することも、意味のあることかもしれない。第二段タガの横ナデ開始部分は、一個所残っている。そのほか、タガ直下の横ナデ部分が波状を呈するが、これは、タガを横ナデ調整する以前に、タガの粘土紐を円筒埴輪の外面に擦りつけた痕跡である。

第Ⅱ図の2（f類の2）　この円筒埴輪の外面調整は、吉田氏によって、右傾・連続のハケメとされている。底部付近にはじまるハケメを、一度に長く引きあげてはいるものの、そののちハケメをさらに加える点からして、これを連続とみるのは困難である。ハケメのはじまりに法則性は看取できないが、ハケメの角度の異なる部分が、拓影の中央やや右よりと左端付近との二個所にある。そして、両者の間隔は円筒埴輪の約半周にあたる。とすれば、ハケメのあり方が半周毎でちがうということにもなろう。

タガの横ナデ開始部分は、少なくとも、第一段タガで二個所、第二・三段タガで各一個所ある。その横ナデはなめらかさを欠き、処々で止まっている。なお、吉田氏がf類とした一群の円筒埴輪のなかに、第三段目にスカシのあるものと、ないものとがあり、これらを同一人の製作とすれば、かかる形態上の相違は何によるのであろうか。

以上、経塚古墳の円筒埴輪における外面調整の代表例を取りあげたわけであるが、こうした視座から、氏の分類した円筒埴輪を再吟味すると、氏が同一工人としたもののなかに、それとみなせないものも混入しているようである。ここでは、その点にことさら触れることは控え、氏の分類基準で工人を弁別するのは容易でない、とだけいうにとどめよう。

加うるに、氏は、埴輪工人の「集団的統一体の最小基本単位」を「工人単位」と呼び、「工人単位がいくつか集まったもの」を「工人集団」と名付けることを提言し、「工人単位」の技法上の表徴として、既述した底部調整技法の有無をあてている。工人に関するこうした把握方法の当否は問わないにしても、なにゆえ底部調整の技法が「工人単位」を示すのかについては、その論拠が

充分示されていない。この論証を欠くなら、「工人単位」を表わす技法が、無理に底部調整技法でなくても、その他の要素でもよいことになる。

いずれにしろ、一古墳内の埴輪から製作工人の実体を復原しようという際に、人間への深い洞察と、ものに対する鋭い観察眼とがなければ、いくら工人集団論を展開しても、何をか言わんやである。しかしそれだからといって、吉田氏の論文が、一古墳内の埴輪から製作工人を論じうる地平を、多少なりとも切りひらいた点には、一応の評価を下しておきたい。

経塚古墳の報文が公けにされない段階で論議するのは、必ずしも実りあるとはいえないので、埴輪の詳細は正報告に託することとし、つぎに、関東地方の埴輪を取りあげた轟俊二郎氏の論文へと筆を転ずることにする。

轟氏の論文[30]は、関東地方わけても千葉県北西部の埴輪を微細に分析することをもって、氏が下総型と呼称する一系統の埴輪を分離抽出し、この種の埴輪を基軸にして、この地域における六世紀から七世紀代の埴輪工人の問題にせまろうとする試みが、主要なテーマである。そして、吉田氏と同様な目的意識をもちながらも、その方法において、一古墳内の埴輪にとどまらず、一定地域の埴輪を克明に追究したところに、轟氏の真骨頂があると思われる。換言すれば、他の系統の埴輪工人との比較を通じて、下総型埴輪という一定の製作伝統を担った工人を探求すること、一古墳内での埴輪の分類から、下総型埴輪工人の実体をあきらかにすること、という二つがアプローチの主な視角といえる。

まず、氏のあげた下総型円筒埴輪[31]の諸特徴を、参考までに列挙してみよう。

(1) 下総型の前段階に比して、作り及び細部の仕上げが粗雑になり、個体差も顕著になる。

(2) 前段階より底径及び口径が縮少し、全体に細身となる。

(3) 巻きあげは、基部の上から口縁部まで連続しておこなうのが原則となる。

(4) スカシは縦長の楕円形となり、穿孔後に指で調整する。

(5) タガは大部分がくずれた山形を呈し、下側のナデも粗雑である。

(6) 第一段タガの位置は、前段階よりかなり低くなる。

如上の特質をもつという下総型円筒埴輪について、詳しく検討したわけでもないので、軽々な論評は避けておくが、かりに、この種の円筒埴輪の分布圏が、一定の伝統をもつ埴輪工人の活動範囲、すなわち製作のために移動した行動圏を示すとする轟氏の所説が承認できるとすれば、埴輪研究にとって、これは重要な指摘

といわねばなるまい。

ひるがえって、吉田氏は、埴輪窯の採用が「一定場所における大量生産性・集中生産性とそこからの一元的供給」を促したと考え、供給範囲の遠距離化が埴輪の軽量化と小型化とを要請し、「大量生産性」が埴輪製作の粗雑化を促進すると述べている。埴輪生産の定着性を唱える吉田氏のこうした考え方が、工人の移動性を説く藤氏の見解と齟齬をきたすとすれば、両者のちがいを、畿内と下総との地方差によるとするのか、はたまた埴輪工人の根本的理解にかかわるとするのかという点が問題になろう。だが、その解決には、実証的研究の更なる積みかさねが必要である。

ついでながら、吉田氏に疑念を呈しておこう。既述の如く、畿内の埴輪の焼成は、五世紀中葉を境にして、概ね窖窯を使用するようになるが、窖窯導入期の円筒埴輪の底径は、それ以前と大差なく、あえて小型化をいうなら、それは六世紀に近づいてからと考える。かかる事象を、吉田氏が埴輪の供給範囲の遠距離化のみで解釈しようとするなら、それは少々単純にすぎるのではなかろうか。古墳毎で埴輪の大きさが異なるばあいの解釈はさておくとして、埴輪が小型化する原因を氏の解釈以外に求めるとすれば、窖窯という一定の空間内において、一度に焼成できる埴輪数を増加させようとする配慮によるとも考えられる。

また吉田氏は、埴輪製作の粗雑化が、「大量生産性」に由因するとしている。しかし、粗雑化への質的ともいえる転換は、五世紀末から六世紀初頭(私案による第Ⅲ期と第Ⅳ期の間)にあり、この時期に埴輪の使用が増加したとも思われないので、粗雑化を「大量生産性」から説くことにも難点があろう。ただし、「大量生産性」という言葉を、埴輪一個あたりの製作に投下する労働量の軽減をはかることによって、単位時間内に製作する埴輪数を増大させるという意味に解し、かかる変化の契機を、埴輪使用の増加とせずに、埴輪がそれまで保持していた意義の変質に求めるならば、一応の賛意を表したい。もっとも、「大量生産性」という語で、右のニュアンスを的確に表現できるか否かは、また別の議論であろう。いずれにしても、「大量生産性」・「集中生産性」という吉田氏の用語に対して、厳密な概念規定を望んでおいた方がよさそうである。

やや脇道にそれたので話を戻すと、下総型円筒埴輪における藤氏のもう一つの分析視角は、一古墳内の円筒埴輪から工人集団の実体を推測しようとする点にある。だが、この論点については少なからぬ不徹底さを内包している。すなわち、氏の円筒埴輪分類の主要な基準は、外面調整のハケメの密度にあり、氏によれば、その粗密が、円筒埴輪のタガの高さと何らかの相関関係をもつと

いう。くりかえすように、下総型なる円筒埴輪を大して実見していないので、立ちいった批評はできないが、畿内の六世紀代の円筒埴輪をみる限り、ハケメの粗密は、埴輪工人を識別する有力な根拠とまではいえないようである。しかもハケメ密度の数値は、同一の工具を用いても、施すときの角度によって異なるし、また、その測定個所によっても差が生じてくる。吉田氏のばあいと同様に、外面調整の方式といった点を、重視すべきであろう。

このように、ハケメの密度やタガの高さに端的にみられることであるが、藤氏の分類基準には、円筒埴輪各部位の計測値を用いる傾向が強い。こうした方法は、一見すればいかにも明快であるが、しかし、計測点のちがいなどによって、その数値が変動する可能性もあるし、なにより、埴輪に印された製作者の手の動きが、数値化によって見失われる危険があるわけである。この点に氏の注意を喚起しておきたい。

同氏によれば、下総型という特質は、円筒埴輪に限らず、朝顔形埴輪や形象埴輪にもあるという。なかでも形象埴輪を、下の基台も含めて、製作技法から把握せんとした点は、高く評価されてよかろう。氏の論述は、下総型埴輪に的を絞りつつも、多岐にわたっているので、そのすべてに触れるゆとりはないが、氏の真摯な研究姿勢と共に、裨益するところの多い好論文の一つといえる。

以上、埴輪について、余りに多くを語りすぎたようである。そのために、残しきたった問題も少なくないわけであるが、小論の主旨が埴輪研究の課題であってみれば、不充分ながらも、所期の目的は一応達したといえようか。なお、私論の詳細については、別の機会を得て、その責を果す所存である。

① 本論にいう埴輪とは、円筒埴輪と形象埴輪とを含めた意味である。そして円筒埴輪には、朝顔形埴輪と通常の円筒埴輪とをあわせて呼ぶばあいと、通常の円筒埴輪のみをさすばあいとの二つの用法がある。本論では、注に断わらない限り、円筒埴輪という語を前者の意味で用いることにする。

② 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」（『考古学研究』第一三巻第三号 昭和二年一三一—三五ページ）

③ 注②の三三—三四ページ

④ 京大文学部考古学研究室・向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」（『史林』第五四巻第六号 昭和四六年 一一六—一三九ページ）

⑤ 石野博信「奈良県纒向遺跡の調査」（『古代学研究』第六五号 昭和四七年 三六—三九ページ）

⑥ 注④の一三一—一三九ページ

⑦ 注④の一三〇—一三一ページ

⑧ 注④の一二〇—一三一ページ

⑨ 指に布又は鞣皮をはさんでなでた可能性が強い。あるいは、埴輪自体を回したのかもしれない。

⑩ 円筒埴輪の最下段を第一段と呼び、それより上を、順次第二・第三段と呼ぶことにする。そのばあい、第一段と第二段とを画するタガを

第一段タガ、第二段と第三段を画するタガを第二段タガと名付ける。

⑪ たとえば、大阪府高槻市宿久庄南塚古墳の円筒埴輪の第一段タガに、粘土紐を指で器壁に擦りつけただけで、横ナデをしないものがある。

⑫ この点は都出氏の示唆による。

⑬ この黒斑については、西口寿生氏との討論に負うところが大きいことを明記しておく。

⑭ 吉本堯俊「金比羅山古墳発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』昭和四〇年　五一―五七ページ）

⑮ 梅原末治『久津川古墳研究』大正九年

⑯ 西谷正『宇治二子山古墳』昭和四三年

⑰ 堤圭三郎「青塚古墳発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』昭和三九年　二〇―二六ページ）

⑱ 高橋美久二氏の御教示による。

⑲ 吉本堯俊「坊主山古墳発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』昭和四〇年　五八―六五ページ）

⑳ 堤圭三郎「胄山古墳発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』昭和四二年　四八―五四ページ）

㉑ 大阪府教育委員会『誉田白鳥遺跡発掘調査概要』（『大阪府文化財調査概要』一九七一―四　昭和四七年）

㉒ 八女古窯跡群調査団『福岡県八女市立山山窯跡群』昭和四七年

㉓ 小林行雄・佐原真『紫雲出』昭和三九年　二九ページ　弥生式土器の黒斑に対する佐原氏の解釈にもやや難がある。たとえば、雲南省瓦族の土器作りをみると、べつだん佐原氏の解釈でなくても、土器の表面に黒斑が付着するようである。李仰松「雲南省瓦族製陶概況」（『考古通訊』一九五八年第二期　三二―四〇ページ）ちなみに、黒斑を欠く土師器が畿内で現われるのは、船橋O―Ⅲからの可能性がある。

㉔ 田辺昭三「須恵器の誕生」（『日本美術工芸』第三九〇号　昭和四六年　八六―九三ページ）

㉕ 小林行雄『埴輪』（『陶器全集』第一巻　昭和四一年　一六ページ）

㉖ 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』昭和三四年

㉗ 近藤義郎編『月の輪古墳』昭和三五年

㉘ 松崎寿和・木下忠・豊元国・池田次郎『三ツ城古墳』（『広島県文化財調査報告』第一輯人文編　昭和二八年）

㉙ 内藤晃氏の御好意により、静岡大学の蔵品を実見させていただいた。

㉚ 田辺昭三「須恵器生産の諸劃期」（『日本美術工芸』第三九二号　昭和四六年　七四―八一ページ）

㉛ 石川県では窯址が未発見であるが、同県羽咋郡押水町北川尻遺跡出土の円筒埴輪片などから、静岡県西部と共通した様相をもつ可能性が強い。橋本澄夫「石川県押水町森本大塚古墳の予備的調査」（『石川考古学研究会会誌』第一〇号　昭和四一年　七九―九一ページ）及び、山村宏・嶋竹秋・大崎辰夫・尾藤晥・宮本豊彦・増井義昭「遠江の須恵器生産」（『古代学研究』第五〇号　昭和四三年　一五―二九ページ）

㉜ 東大文学部考古学研究室編『我孫子古墳群』昭和四四年

㉝ 畿内以外の例としては、和歌山県和歌山市森の井辺八幡山古墳・香川県善通寺市善通寺町の香色山遺跡、以上二遺跡出土の円筒埴輪が、底部調整技法をもつかもしれない。実見によって検証しなければならないが、いずれにしろ、この技法は畿内色が強いといえよう。森浩一・伊藤勇輔他『井辺八幡山古墳』昭和四七年。松本豊胤「香川県善通寺市香色山出土の円筒棺」（『考古学雑誌』第四六巻第三号　昭和三五年　四六―五六ページ）

㉞ 吉田恵二「埴輪生産の復原」（『考古学研究』第一九巻第三号　昭和四八年　三〇―四八ページ）

㉟ 吉田氏は、円筒埴輪最下段＝第一段を基部と呼んでいるが、適切な用語とはいえないであろう。

㊱ 注㉞の三四ページ

㊲ 佐原真「弥生式土器製作工程観察の一例」（『考古学研究』第一九巻第三号　昭和四八年　一〇七―一一二ページ）の注②参照。

㊳ こうしたハケメのつけ方と同様なものが、京都府城陽市観音堂冑山第一号墳（注㉚）の円筒埴輪にある。

㊴ 轟俊二郎『埴輪研究』第一冊　昭和四八年

㊵ このばあいの円筒埴輪という語は、通常の円筒埴輪のみをさし、朝顔形埴輪は除外している。

追記　ハケメの角度について、本文の説明と図版とが一致していないが、これは印刷の関係による。一応本文の方を正確とみていただきたい。

（京都大学大学院・京都市左京区黒谷町一　水口方）